

はじめに

現在、世界各地で発生している紛争の要因には、さまざま問題をあげることができるが、その中でも看過できないものが、資源管理をめぐるものである。植民地主義は言うに及ばず、古来から資源の獲得をめぐることは、多くの紛争が発生してきた。そうした資源の獲得や所有にとどまらず、資源をいかに活用し、そして同時にいかに保全していくかという資源の管理をめぐる紛争が、資源の荒廃や枯渇とあいまって、近年、多発しているのである。資源管理の問題は、現代世界の紛争を考える上で、決して無視することのできない重要な要素の一つとなっていると言えるであろう。

本研究は、こうした資源管理をめぐる紛争の予防と解決について考察することを目的としている。有効、かつ適切に資源を管理していくことは、紛争の予防につながると同時に、すでに起こってしまった紛争を解決に導くことにもつながる。本研究は、文系、理系双方の多分野にわたる研究者によって構成された共同研究を通じて、資源管理をめぐる紛争の予防と解決をトータルにとらえることを試みようとするものである。

まず冒頭の松尾論文では、資源をめぐる国内における集団的武力紛争に焦点が当てられ、従来の研究に基づきながら、国内武力紛争の要因としての自然資源の問題について理論的枠組みの検討が行なわれている。そして、資源に対する国内外における需要の増大、「弱い国家」の存在、動員の可能性、の三点が国内資源紛争の一般的要因としてあげられている。

次の Szell 論文では、平和研究の新たな次元としての環境紛争が論じられている。Szell 論文は、歴史を振り返りながら、多くの紛争が天然資源をめぐることで発生したものであったことを指摘し、近年では、天然資源の過剰搾取から、環境紛争が平和研究の射程に入ってくるようになった状況について、具体例を用いながら解き明かしている。

資源管理をめぐる紛争の予防と解決をアジアにおける事例に基づいて考察しているのは、中越・洪論文、村田論文、今岡論文、熊谷論文である。中越・洪論文は、朝鮮戦争休戦以降、長い間、人間の干渉を受けずに放置されてきた朝

鮮半島の非武装地帯とその接境地域周辺を対象に、そこでの持続可能な発展につながる生態系の保全策について検討し、将来の朝鮮半島の平和を約束する「平和の地域」としてのその重要性を論じている。

続く村田論文が対象とするのは、石油や天然ガスといった未開発の膨大な地下資源をめぐる、さまざまな行為主体が利害関係を複雑に絡ませ紛争となっているフィリピン・ミンダナオ島のリガワサン湿地帯である。村田論文は、ガバナンスを重視し、湿地帯住民の意見を政策に反映させ、関係行為主体間での信頼構築を図ることこそが、資源の開発を新たな緊張状態の火種とさせない上で重要であると指摘する。

資源をめぐる紛争が続くフィリピン・ミンダナオ島に対して、モンゴルでは、資源をめぐる紛争が未然に予防されてきた。今岡論文は、そうしたモンゴルの事例を分析し、遊牧の移動性という特質と、もめごとを避け協調して生きようとする遊牧民の共同体の論理が資源をめぐる紛争の予防に依然有効なものとして機能していることを明らかにしている。

モンゴルと同じく、家畜が重要な位置を占めるネパール東部山岳地域について分析を行っているのは、熊谷論文である。熊谷論文は、森林・草地資源管理と移牧システムの軋轢における外圧の影響を指摘し、シェルパ民族が生業を通じた内発的發展を機軸とした土地管理を望む限りは効率的な土地資源管理がなされていくであろうと予測している。

一方、オセアニアの事例について論じているのが、鎌田論文と小柏論文である。オーストラリアでは、先住民族アボリジニによる土地権・先住権の要求が、過去40年近くにわたって大きな 이슈となってきた。カカドゥ国立公園を事例に、鎌田論文は、地元アボリジニ共同体の土地権の要求と土地利用に関する意思決定過程への参加の流れをたどり、国立公園の共同管理制度に見られるような「協治」の制度の創設が必要であると論じる。

太平洋島嶼諸国を中心としたオセアニアの漁業資源と森林資源の管理をめぐる紛争の予防と解決をとりあげた小柏論文では、そこでの地域協力の機能に焦点が当てられ、資源管理をめぐる紛争に地域協力が有効な役割を果たすにはどのような要件が求められるか、考察が試みられている。域外諸国を相手とした

「外向き」の国家間協力であるオセアニアの地域協力の特質が、資源管理をめぐる紛争の性質とかみ合った場合、地域協力が効果的に機能し、紛争を抑制する上で有効な役割を果たしているとそこでは論じられている。

最後にとりあげられているのは、天然資源が武力紛争と結びついている構造を顕著に示すアフリカの事例である。篠田論文は、「内戦の政治経済学」の研究動向によりつつ、シエラレオネ、およびコンゴ民主共和国を例に、天然資源と武力紛争との結びつきを論じ、国際管理体制をはじめとする紛争予防としての天然資源管理の重要性について指摘している。

資源管理をめぐる紛争は、一日にして起こるものではない。それは、長期にわたるさまざまな要因によって、あたかもマグマのように蓄積されるものである。そうした紛争をどのように予防し、解決していくかも、長期、かつ多様なアプローチが必要とされる。本研究が提示しているさまざまな視角は、そうした包括的なアプローチの構築を図る上で、一つの見取り図を指し示すものと言いうことができるであろう。